自治体維新

首長インタビュー

千葉県成田市長

小泉　一成 氏

こいずみ・かずなり　1956年千葉県成田市生まれ、57歳。79年日本大学法学部卒。94年に成田青年会議所理事長。95年４月から2003年４月まで成田市議会議員２期。07年１月に成田市長に初当選、現在２期目。大の野球ファンで、中学は野球部員、高校は応援団。「下手の横好き」とはいうものの、自らプレーもするし、観戦にも出かける。ひいきの球団はもちろん千葉ロッテ。お祭りも大好き。

オープンスカイ、羽田と共に勝ち残る

成田国際空港は５月に開港35年を迎えた。先立つ３月にはオープンスカイ政策が実施され、空港と共に発展してきた成田市は新たな国際競争に直面している。２期目の小泉一成市長（57）は、空港の進化・発展を支えるため、悪天候時などのやむを得ない場合に限り空港の発着可能時間を夜12時まで１時間延長する決断を下した。さらに空港の活用で新たに医療産業の集積を図り、成田山新勝寺など地元の歴史文化遺産の魅力発信に力を入れることで、成田の持つ多彩な姿を全国に伝えようとしている。

夜12時の離着陸に同意は苦渋の決断

成田空港では、早ければ2014年度中に発着枠が年３万回拡大され、30万回となる見通しだ。国内外ともに新規就航の増加が見込めるが、オープンスカイ（航空自由化）の波を受けて、アジアの主要空港との競争がますます激化する。

成田空港建設の閣議決定前までは、成田市の人口は減少傾向にあった。だが、1978年５月20日の開港後、人口は２倍に増え、市の財政は約５倍に増加した。やはり成田空港の存在は大きい。空港と成田市は運命共同体だと思っている。まちづくりを進めていく上で、国際空港があることは大変ありがたく、アドバンテージの高さを痛感する。空港は進化、成長させていく必要がある。国と成田国際空港会社から航空機の発着回数を30万回に増やしたいという要請を受けたのは私が市長に就任してからだ。成田市が会長を務める成田空港圏自治体連絡協議会（９市町）は１年で合意にこぎつけた。当時の民主党政権内から突然、羽田のハブ化構想が飛び出したことが、地元自治体の危機感を高め、早期の合意につながったのだと思う。その間、合意に向け騒音地域の住民と50回は話し合っただろう。

成田にもオープンスカイ政策が適用されたのも大きな変化だ。これにより政府間協議を通さずに、空港と内外の航空会社だけで路線や便数を自由に

禁複製・無断転載

決められるようになった。航空会社が自由に空港を選べ、撤退も自由なので、本格的にアジアの空港と激しい競争にさらされることになる。だから成田は選ばれる空港になり、海外のエアラインにも成田に根付いてもらわなければならない。

成田空港は2014年度中にも発着回数を年30万回に拡大

LCC（格安航空会社）の進出も新しい動きだ。30万回合意で発着枠に余裕ができたので、LCCが成田空港を拠点に展開するようになってきた。現在はジェットスター・ジャパンとエアアジア・ジャパンの国内２社だが、今秋にはピーチも入ってきて関西国際空港と成田を結ぶ。外国のLCCも就航するようになった。その分、成田が安くてより速く海外とも結ばれるようになったわけだ。成田空港は国内路線が弱いと言われてきたが、LCCの就航により北海道や関西、四国、九州、沖縄など国内の主要な地方都市の空港と結ばれるようになったのは心強い。

LCC就航では課題もある。安く飛ぶので余分なコスト削減で航空機材も数機程度で運航している。北海道の大雪など天候要因で飛べなくなると、成田は朝６時から夜11時までと運用時間が決められているので、欠航になってしまう。これではLCCが成田から出てしまうのではないかという不安を我々は抱いていた。

そこに昨年12月、国と空港会社から悪天候や異常事態などやむを得ない場合に限り、朝は５時から着陸、夜は12時まで離着陸できるようにしてほしいという提案があった。騒音地域住民と話し合ったが、「とんでもない」という反応だった。騒音地域住民の了解を得ようと説明会などを開いたが、了解はもらえなかった。しかし、地域経済の将来を考えて、騒音地域の皆さんには申し訳ないが、苦渋の決断で合意をさせていただいた。ただ、「夜の12時まで」は了承したが、「朝５時から」は断った。国と空港会社には「朝５時から」は断念してもらった形だ。成田空港の利便性が向上する半面、騒音地域の住民との信頼関係が崩れてしまったのは心苦しい。今後、信頼関係を再構築していくのが私に課せられた責任だ。

羽田空港との関係でいえば、互いにいがみ合っている時ではない。お互いに強みと弱みがある。その点を互いに補完し合うことで、アジアの空港との競争に対抗していく必要がある。交通網の整備により成田と羽田が今後、非常に近くなるだろう。アジアと対抗するためにも羽田との補完体制構築は絶対に進めなければならない。

新たに医療関連産業の集積を目指す

市は次代の産業集積として「医療」をターゲットにする。大学医学部を誘致した場合、医療機器や製薬などの医療関連産業がどのように集積し、どれだけの経済効果があるかなどの調査を進めている。秋には公表する予定だ。

空港立地のアドバンテージを生かすことで産業を呼び込もうと取り組んできた。成田市には工業団地が４つあるが、ほとんどは埋まっている。進出企業には３年間、固定資産税分を補助する企業誘致促進策をとったのも奏功したようだ。首都圏中央連絡自動車道（圏央道）の整備が進んでおり、空港の発着枠30万回の実現も加わって、企業誘致の促進につながるだろう。

今後は新たに医療関連産業の集積を目指したい。千葉県は実は医療後進県だ。人口10万人当たりの医師数と看護師数は全国で３番目に少ない。一番の原因は620万人県民の千葉県で、医師の養成機関が千葉大学医学部しかないことだ。国が大学に医学部の新設を認めれば、成田は誘致にすかさず手を挙げる。新設を希望している大学は全国にた

禁複製・無断転載

くさんある。成田に来てくれれば、できる限りの協力をする、将来大学医学部をはじめ医療機器、医薬品など医療関係が集積する医療産業クラスターを形成することが目標だ。

成田山新勝寺の参拝客数は年1000万人以上

「空援隊」や「ソラガール」が地元の魅力発信

華やかな羽田空港に比べ情報発信では後れをとってきた成田も最近、地元の魅力を発掘・発信しようと動きだした。仕掛けたのは市職員らがボランティアで活動する「成田空援隊」や「成田ソラガール」。市も４月１日に「成田ブランド推進室」を設けて力を入れる。

人口13万人の成田市内には年間1000万人以上の来客がある施設が３つある。空港の来訪者が3000万人以上、成田山新勝寺の参拝客も1000万人以上、イオンショッピングセンターの来客も1000万人以上に上る。中でも成田山新勝寺は1000年以上の歴史があり、長い時間をかけて門前町が形成されてきた。知名度も高い。歴史と伝統がある成田山新勝寺とその門前町を生かしたい。市観光協会と商工会議所がお客を呼び込むために、１カ月に１回は必ずイベントを開催している。

最近にぎやかになったのは４月の太鼓祭りで、２日間に20万人以上の来客があった。最近、定着してきたのが土用の丑の日に合わせて開催している「成田うなぎ祭り」だ。成田駅から成田山の総門まで参道の長さが800mも続く。その参道の両側にうなぎ屋が約60軒も軒を並べている。江戸時代からの老舗も多い。観光協会中心にうなぎの町を売り出して行こうと取り組んでいる。

空港とともに、成田山新勝寺など地元固有の魅力を発掘して全国発信していこうと取り組んでいる。市職員や空港会社社員、青年会議所メンバーの男性で立ち上げた「成田空援隊」と市女性職員有志でつくる「成田ソラガール」が頑張っている。成田空援隊が考えた女性限定の航空機写真の撮影会は大好評だ。空港近くの公園は滑走路のすぐそばで、いろんな飛行機の離発着がみられる。写真を撮る人たちが結構いるので、試しにそこで女性限定の航空写真モニターツアーを開催したところ、あっという間に定員が埋まってしまった。その後も企画するたびに満杯になる。飛行機写真を愛好する女性に「空美（そらみ）ちゃん」と命名して話題になっている。成田ソラガールが地元の食材を使って開発した「成田ソラあんぱん」も人気を集めている。今年３月にはローソンが自社版の「成田ソラあんぱん」を開発し、期間限定だが3000店舗強で売り出したほどだ。成田ブランド推進室を中心に成田の魅力を全国や世界に発信していきたい。

インタビュアーから▶▶

空港のおかげで財政力は強い。一般会計予算は560億円規模だが、空港の固定資産税だけで100億円に上る。人口も国立社会保障・人口問題研究所の予測では2040年でも10年比で５％増だ。「千葉県内市町村の中で成田市だけ増えるのは、空港関係の雇用拡大が見込めるから」と小泉市長。ただ、「人口を増やせばそれなりにコストもかかる。人口増はありがたいが、むしろ今から成田ファンを増やしておきたい」と交流人口の拡大に注力する。現状に油断せず、先手を打っておこうという手堅い考えだ。

（主任研究員　**古山　幹雄**）

禁複製・無断転載